

榛名山から赤城山へ、  
200羽の鶏とお引越し。



すぎな農園  
竹淵進さん 智子さん

今回取材したのは、養鶏業を中心とした兼業農家の竹淵夫妻。群馬県出身の夫・進さんは、妻の智子さんとともに、都内から旧倉淵村(現・高崎市倉淵町)へ移住し農業を営んだのち、平成29年に前橋へやってきた。まずは、赤城山の南麓に位置する富士見町に畑と田んぼを借りて農業を始めたという竹淵さん。4年ほど倉淵と前橋を行き来する生活をしたのちに、前橋で新たに鶏舎を作り、200羽にもなる鶏や雛たちを運んできたという。

進「私たちが営むのは、養鶏場を中心とする『すぎな農園』という農場です。鶏舎は平飼いなので、床は土。その上で鶏たちが自由に動き回っています。のびのびストレスなく過ごしてもらおうと、おいしい卵を産んでもらえるんです。それと、自前でブレンドしている餌を与えるのも大切なこと。一般的な飼料はどうもろこしを主体にしていますが、それを一切使わずに国産のお米や麦で作っています。それゆえ、レモンイエローのような自然な色合いの黄身がでています。卵独特の臭みが弱くあっさりした風味だからか、子どもたちには特に人気ですね」

まちな、標高も、農業も変わった

進「倉淵と比べると標高が半分ほど低くなりました。倉淵は標高600m以上だったので、農作物を作る環境としては非常

に大きな変化ですね。標高の高い倉淵では、冬になると気温が氷点下10度くらいまで下がってしまうこともあるので、野菜が冬を越せない状況でした。また沢水がとても冷たいので、お米が生育しづらくて。それが富士見町では秋に蒔いた野菜、例えばニンジン、ブロッコリー、キャベツなんかは冬越しして春まで食べられるんですよ。反面、暑いのが苦手な鶏には、前橋の猛暑はかなり辛いでしょうね。暑すぎると産卵する卵の数が目に見えて落ちてしまいます。それはちょっと大変なところかも」

智子「私は東京都出身なので、前橋は空間が広いのがいいですね。空も広いし。ただ、大都市に比べると交通が不便ですよ。東京にいる時は自分が車の免許を取るなんて思いもしなかったのに、車がないとどこにも行けないので、中之条町の町営の教習所へ通いました。都内にいる頃は編集の仕事をしていて一夜漬けタイプだった私にとって、やるべきことをその時やらないといけない農業に慣れるのには時間がかかりました(笑)」

移住は自力と他力で

進「移住の際は、空いてる畑を探しては近隣の人に聞いて回ったり、市の農業委員会に直接聞いて交渉しました。実際に移り住んで農業を始めたら、周りの人が声を掛けてくれるようになりました。移住コンシェルジュの鈴木さんもその一人。移住や地域生活のサポートをしていると

いうことで、鶏舎を立てる土地はありませんかと相談に行きました。彼は本当にフットワークが軽くて、『今から農家さんのところへ一緒に行きましょう！』と言われ、勢いそのままその農家へ向かったんです。そうしたらその農家さんが『会合で鶏舎の土地のことを話題に出してあげるよ』とおかげですぐに土地が見つかり、鶏舎を建てることができました」

智子「その後、私たちの住む家も見つけられました。富士見町に住んでいた友人の勧めで、空き家に半年くらい仮住まいさせてもらっていた頃、犬の散歩の途中で良さそうな空き家を見つけて、近隣の人に所有者を紹介してもらいました。昭和47年頃に建った、ザ・昭和という感じの落ち着いた家なんです」

頼もしい仲間の力を借りて  
(ノマド市)再開

進「鈴木さんとは、彼らが(IRORI場)というコミュニティ・スペースを始めるというところで、そこで再会しました。以前は前橋の中心市街地で定期的な実施していた(ノマド市)というマルシェを、IRORI場の庭を活用して再開することにになりました。まちなかで開いていた頃は出店者がなかなか集まらなかったのですが、農家だけでなくキッチンカーやクラフト系のブースなど、初回から20店もの出店規模になりました。鈴木さんの強力なネットワークのおかげです。

もうひとつ、ここで実現したいことがあるんですよ。それは、農業体験や暮らしの体験。農業だけではなく、田舎の暮らしも含めて感じてもらえたらと。名付けて(のらたまの庭)」

智子「お客さんというより、一緒にやりましょうというスタンスです。都会にいる人って、土に触れていなかったりとか、その感覚がわからなかったりすると思うんです。群馬の方が生活しやすいね、地方で暮らすのもいいね、って感じてくれる人を増やしたいです」

※お試し移住の場などで活用され、令和3年3月を以て終了



すぎな農園を手伝う丸山さん(写真右)も、田舎の環境や野菜作りに憧れて東京から移住してきた。写真やデザインの特技を生かして仕事をしながら野菜や米作りに動んでいる。

